

やはり横浜渚は誰よりも漢女だった。

きむら たくや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戸塚彩加が誰よりも女らしい男ならば

横浜渚は誰よりも男らしい女だった。

そんな彼女がひよんなことから奉仕部と出会う、そんなひと夏のアバンチュール。

※この作品はフィクションであり、実際の団体・人物等は関係ありません。また、未成年者による飲酒、喫煙等のシーンが含まれるかもしれませんが、未成年者の飲酒、喫煙等を助長している訳ではありません。不愉快に感じる方はご覧にならないことをお勧め致します。

目次

いつものドアを	1
超常現象	7
ひょうひょうと	13
ひょうひょうと	17

いつものドアを

オツス、オラ八幡。

何か知んねえけどよ、よく分かんねえうちに奉仕部つて部活に入れられちまったぞ。雪ノ下っていうとんでもなく口の悪い女がいるし、由比ヶ浜っていうパイパイのでっけえ女も入ってくるしでオラぶったまげたぞ。

「比企谷くん？ 貴方また失礼なことを考えているでしょう？」

相変わらず俺の考えを読むな、怖えよ。

俺がひそかにエスパ―なんじゃないかと疑っているのがこの雪ノ下雪乃だ。

「べ、別にけんげえてねえぞ!？」

イカン、かの有名な戦闘民族さんの口調のままじゃねえか。

これはまちがいがなく弄られる（好意的解釈）。

「何故貴方が変な訛り方なのかはこの際訛谷くんくらいどうでもいいことなのだけけど、それよりも早く今学期の活動報告書を提出してくれないかしら？」

そう、季節は夏。

俺の待ちに待ちに待ち望んだ夏休みまで後3日だ。

しかし夏休みの前なのにも関わらず宿題が課せられた。

それが活動報告書なのだ。

「活動報告つってもなあ。』とつかからのいらいをとくにがんばりましたまるとかじゃダメなのか？」

俺の中の想像上の由比ヶ浜レベルの文体になってしまったが、嘘はついていない。

「ゆきのんこれでゆるして〜ほしみ♪」みたいなの？

やっぱダメだわ、自分でも最高にキモい。

「貴方って少しは真面目にお話が出来ないの？まあミジンコ以下の存在感と知能しかない矮小谷くんに期待した私が悪かったわね」

相変わらず俺を罵倒するときの楽しそうなこと。

いいの？何とはあえて言わんが八幡そろそろ目覚めちやうよ？

「内容自体は戸塚くんのことでもいいから、それをキチンと書きなさい。私だって急に提出することを要求されて面倒なのよ」

ハーツと聴こえそうなくらいにわざとらしいため息をつく雪ノ下。

まっ、部長さんは大変みたいだしパパッと書いちゃいますかね。

30分が経過しようとしたとき、部室の扉が開けられた。

「活動報告書はそろそろ出来たか？」

声の主は奉仕部顧問の平塚静教諭（〇〇歳）。

あれ？何かフィルターかかっているけどバグ？

そして次の雪ノ下のセリフは「先生、ノックを（超絶裏声）」と言う！

「先生、ノックを」

ハッ！

いや、俺がハッとしてどうすんだっての。

てかジョセフカッコいいよな。

俺も家の資産で不動産転がして不動産王になりてえ。

因みにジョセフは自分の資産だからそこんとこよろしくな。

「ハッハッハ、すまんすまん。ところでな、今回はキミ達に依頼を持ってきたんだ」

悪びれる様子もなく頼み事かよ。

自分が上の立場だからってこんなんじやあ結婚どころか彼氏す…

何処からか殺気を感じる、この話題はやめよう。

「依頼、ですか。とりあえず話だけお聞きします」

まあ部長だし？決定権は部長にあるけど？

少しくらい俺に確認取ってくれてもいいんじゃないの？

俺だったら絶対断るけどね。

某新宿のスイーパーみたいに女性からしか受けなくらいの潔さを俺は持ちたい。

「実はな、どうにも困り果てた生徒が居るんだ。彼女は自分に素直過ぎるが故に孤立してしまっていてな。性格は言った通り素直でサッパリしてる。比企谷と違って更生が必要な訳ではないからどうしたものかと思って相談に来た次第だ」

なるほど、俺と同じぼっちか。

だったら答えはいつも一つ！

「自分がバカ正直に思ったこと言っちゃうつてことを自分で分かっている前提で話しますが、それでも治そうとしない、若しくはそれ程口が悪いかだったら開き直つてると思うんですよ。『あつ、別に友達なんていらんないんだな』って。ソースは俺ですが」

俺の場合は開き直つたというか悟つただったけどな。

ここに来て冒頭の伏線を半分回収！

あとは「空」だけだな！

うん、何か色々とごめんって。

「空気谷くんは少し黙って頂戴。話が進まないわ」

あつ、回収しなくて良かったのに…。

でもちよつと達成感。

オラ、これからの展開にはゾクゾクしてっけどな！

「まあなんだ、とりあえず会って話をしてみたら見えてくるものがあると思っつてな。実は連れて来てる。横浜！入っていいぞ！」

再び部室のドアが開き、その横浜という”男”が一礼しながら入ってくる。

ん？彼女って言っつてたのに男じゃんこいつ。

てか何でスカート履いてんの？趣味なの？それとも性癖なの？

「横浜、簡単でいいから自己紹介頼むな」

先生に小声で「ウツス」って言っつてんの聞こえてっからな？

完全に男じゃんか。

背も俺より高いし。

多分170前半くらいじゃねえかな。

「オレは3—Bの横浜渚だ。こう見えてもれつきとした女だからな。その腐った目した野郎、オレを男だと思っつただろ？んなもん目付きで分かんだよタコが！いいか覚えとけ！オレは正真正銘女だ」

俺は学校中の嫌われ者の自覚はあつた。

後ろ指指されたり陰口を叩かれるのには慣れている。

だが…。

初対面で舌を出しながら中指を立ててくる、自称女子と対面するのは初めてだった。

超常現象

さて、前回までのあらすじ。

何か横浜渚とかいう男みたいな女？が奉仕部に来た、以上。

てか誰に向けて言ってるの？しかもあらすじのわりに短すぎるし。

まあとりあえず状況を確認しよう。

一、平塚先生が面倒な依頼を持ってきた。

二、初対面の女子にすっごい目の敵にされてる、これはいつもだったわ。

三、中指を立てて見下ろされてる。↑イマココ！

うん、この先輩は俺よりも先に更生すべきなんじゃないかな。

てか俺じゃ無理だわ。

八幡完敗、略してハチカン。

すげえ！急に1000年に一人のアイドルっぽくなった！

「お、おい。お前まさかオレが女だって本気で信じてないのか…？」

急に震えだした横浜くん。

どれだけ女だと思われてみたいんだよ。

てかやつべえよ、考え事してたら返事するの忘れてたなんて言えねえよ。

「せ、せせせ先輩は可愛い女の子だとおお思いましゅよっ!？」

「やつぱり信じてないんだな…。いつもそう思われてるから別にいいんだけどさ」

プイツと顔を逸らす横浜先輩。

怒っているのか、少し頬が赤く染まっている。

何だよ、ふとした仕草はちゃんと女の子じゃねえか。

「今確信しました。先輩はちゃんと女性ですね。なのでさっきの件をセクハラとして訴えないで下さいお願いします」

なんなら20秒程ゲザるのも辞さない。

もつと言えば頭を踏んでくれてもいいままである。

いや、趣味とかじゃないからね？

「セク谷くんが有罪か無罪じゃないのかはともかくとして、横浜先輩の問題を考えましょう。因みに横浜先輩は、どういう経緯で平塚先生に連れて来られたのですか？それと、ご挨拶が遅れました。私は2年の雪ノ下雪乃です、奉仕部の部長をしています。そしてその目の腐敗しきつた彼は同じ2年の比企谷八幡です」

それつてもうギルティしかないんじゃない？。

しかも、雪ノ下からフルネームで呼ばれたのは初めてな気がする。

因みに由比ヶ浜はトップカーストカラオケ会に行っていて今日はいない。

「わざわざ律儀にすまん。別に経緯つて程のものでもないと思うんだけどな？ たまたまオレがいつも一人でメシ食ってるのを先生にツッコまれて、話しているうちに先生と仲良くなったと思つたら、急に連れて来られたんだよ。正直な話、オレが一番ビツクリしてるんだよな」

「そこからの話は私がしよう」

これ以上喋られたら自分の評価に関わると思つたのか、平塚先生が割り込んできた。あれ？ 最初から先生が説明してくれば良かったんじゃない？

「横浜と話していると、私の学生時代とどうしても被つてしまつてな。しかも横浜はこの通りツリ目がちで、口調もその辺りの女子とは違う。こんなに良い奴なのに一人で居るのは勿体ないと感じたのだ」

簡単に言えば私の老婆心だな、と続けて一人で落ち込んでいるよ。

誰か貰つてあげてくれないかね？

「んんっ！ つまりだ、横浜の良さをどうやったら周りが理解出来るようになるか、それが依頼と言つてもいいだろう」

「それにはまず、横浜先輩自身が友人を求めているかどうか気がなります。横浜先輩、どうでしょうか？」

雪ノ下が言っていることは如何にも正論だ。

俺たちは善意を押し売りしている訳ではないしな。

「オレが珍しいのかも知れねえけど、普通の友達なら別にいらねえんだ。本当に何もかもを話せる親友が数人居てくれたらそれでいい。まっ、高校3年になってもまだ一人も見つかってないんだけどな」

ハツハツハと笑う横浜先輩。

正直な話、笑えねえよ。

俺が心の奥底で求めていたものを。

いや、今までは求めていないと思っていたことを平然と言つてのけてやがる。

そうか、俺は本物が欲しかったんだ。

完全に対等、どんな話だろうとこいつには出来るつていう関係。

それに気付かされた俺の顔はとてもひどいものだっただろう。

「比企谷くん、貴方物凄い顔しているわよ?」

「何だよ、そんなにビククリするこたあねえだろうよ…」

やはりこの先輩は俺の本心をわかっている。

こんなに簡単に俺を理解してくれる他人は初めて見た。

俺が友人になってみたかった雪ノ下よりも、今は素直に先輩と友人になってみた

なった。

勿論そんなことは言えないが。

「まあ何だ、ちよつとビックリしただけだ。それよりも提案なんだが、人と一緒に行動するのに慣れるためにも、しばらくの間奉仕部に参加してもらうつてのはどうだ？」

正直苦肉の策だ。

見つめ合つてないけど素直になつてなれないんだからねっ！

意外であろう、俺の前向きな提案に対し雪ノ下と平塚先生は目を見開いている。

しかし、彼女は違つた。

平塚先生よりも豪快に笑つてみせたのだ。

「いやあすまんすまん。確か比企谷だつたな？ 気に入つたぜ。オレとしては異存はないんだが、雪ノ下と先生はどうだ？」

「私も問題ありません。先生もよろしいですね？」

先生は無言で頷いた。

ここで、横浜渚の奉仕部参加（仮）が決定した。

当人の横浜先輩は満面の笑みを浮かべている。

「つてことでよろしくな！ それと、これからはお前らのことは下の名前で呼ぶからな！ 勿論、オレの事も下の名前で呼ぶようにな？ 改めてよろしくな、八幡、雪乃！」

驚愕の宣言に、俺と雪ノ下は互いに目を合わせていた。

雪ノ下は軽く溜息をつくフリをしていたので、察してしまった。

これは諦めろってことなんだな…。

「分かりました、なっ…ぎさ先輩。改めてよろしくお願いします」

これはアレじゃん。

由比ヶ浜にしか見せないデレのんモードに若干入りかけてんじゃん。

デレのんマジチョロのん。

「俺もよ、よろしくお願いします、先輩」

雪ノ下から非常に強い殺気を感じたので、先輩に向き合う。

こいつ悪意に関して敏感すぎじゃね？

やっぱエスパーなんじゃないの？

「やっぱりお前って素直じゃないのな。見逃してやるのは今回だけだぞ？」

ケタケタ笑いながら言う先輩。

この人には敵わないと素直に思った。

が、不思議と嫌な感じはしなかった。

ひょうひょうと

「お兄ちゃん早く起きて〜」

「うーん、あと80分くらい…」

「そんな時間があると思ってるの？全くごみいちゃんなんだから」

朝っぱらから茶番に興じるのは、俺の愛すべき妹の小町。

千葉の兄貴風に言うのと、ラブリーマイエンジェルといったところか。

小町からはシスコンシスコン言われるが、断じて違うぞ？

ただ一番愛している異性が妹ってだけだ。

妥協じゃなく理解してほしい。

「んゝんゝつ、冗談だよ。おはようさん」

「おはよ！お兄ちゃん！ご飯出来てるから早く準備してよね」

「分かった、さっさと着替えてくるわ」

「んっ、よろしい」

そう言って俺の部屋から出る小町。

さてと、言った手前急いで準備しなきゃな。

準備も終わらせリビングに向かうと、愛妹特製の朝食が並んでいた。

「簡単なものだから」と言うが、いつもありがとうな。

と、心の中で思っておく。

本人に直接言えばって？嫌だよ恥ずかしい。

「つてことでお兄ちゃん、今日もよろしくね〜」

「俺じゃないと送ってくれて言ってるの分からないぞ。あつ、これ八幡的にポイント

高い」

「小町的にはちよーつとポイント低いかな…」

イマイチ小町のポイントシステムが理解出来ないお年頃。

ポイントカンストさせたらどんな特典あるんだろ。

まさか、小町と結婚…？

とかかんとか妄想を広げながらも朝食を食る。

「そうだ、お兄ちゃん夏休みは奉仕部あるの？」

「そういえば聞いてなかったな。今日雪ノ下に聞いてみるわ」

そうか、部活っていうのは夏休みもやるものだったな。

でも授業がある訳でもないし、依頼なんてどうせ来ないだろうけど。

「お兄ちゃん早く起きて〜」

「うーん、あと80分くらい…」

「そんな時間があると思ってるの？全く〜みいちゃんなんだから」

朝っぱらから茶番に興じるのは、俺の愛すべき妹の小町。

千葉の兄貴風に言うと、ラブリーマイエンジェルといったところか。

小町からはシスコンシスコン言われるが、断じて違うぞ？

ただ一番愛している異性が妹ってだけだ。

妥協じゃなく理解してほしい。

「んゝんゝつ、冗談だよ。おはようさん」

「おはよ！お兄ちゃん！〜飯出来てるから早く準備してよね」

「分かった、さっさと着替えてくるわ」

「んっ、よろしい」

そう言っただけの部屋から出る小町。

さてと、言った手前急いで準備しなきゃな。

準備も終わらせリビングに向かうと、愛妹特製の朝食が並んでいた。

「簡単なものだから」と言うが、いつもありがたいな。

と、心の中で思っておく。

本人に直接言えばって？嫌だよ恥ずかしい。

「つてことでお兄ちゃん、今日もよろしくね〜」

「俺じゃないと送つてくれって言ってるの分からないぞ。あつ、これ八幡的にポイント高い」

「小町的にはちよーつとポイント低いかな…」

イマイチ小町のポイントシステムが理解出来ないお年頃。

ポイントカンストさせたらどんな特典あるんだろ。

まさか、小町と結婚…？

とかかんとか妄想を広げながらも朝食を食る。

「そうだ、お兄ちゃん夏休みは奉仕部あるの？」

「そういえば聞いてなかったな。今日雪ノ下に聞いてみるわ」

そうか、部活っていうのは夏休みもやるものだったな。

でも授業がある訳でもないし、依頼なんてどうせ来ないだろうけど。

ひょうひょうと

「お兄ちゃん早く起きて〜」

「うーん、あと80分くらい…」

「そんな時間があると思ってるの？全くごみいちゃんなんだから」

朝っぱらから茶番に興じるのは、俺の愛すべき妹の小町。

千葉の兄貴風に言うと、ラブリーマイエンジェルといったところか。

小町からはシスコンシスコン言われるが、断じて違うぞ？

ただ一番愛している異性が妹ってだけだ。

妥協じゃなく理解してほしい。

「んゝんゝつ、冗談だよ。おはようさん」

「おはよ！お兄ちゃん！ご飯出来てるから早く準備してよね」

「分かった、さっさと着替えてくるわ」

「んっ、よろしい」

そう言って俺の部屋から出る小町。

さてと、言った手前急いで準備しなきゃな。

準備も終わらせリビングに向かうと、愛妹特製の朝食が並んでいた。

「簡単なものだから」と言うが、いつもありがとうな。

と、心の中で思っておく。

本人に直接言えばって？嫌だよ恥ずかしい。

「つてことでお兄ちゃん、今日もよろしくね〜」

「俺じゃないと送ってくれて言ってるの分からないぞ。あつ、これ八幡的にポイント高い」

「小町的にはちよーつとポイント低いかな…」

イマイチ小町のポイントシステムが理解出来ないお年頃。

ポイントカンストさせたらどんな特典あるんだろ。

まさか、小町と結婚…？

とかかんとか妄想を広げながらも朝食を食る。

「そうだ、お兄ちゃん夏休みは奉仕部あるの？」

「そういえば聞いてなかったな。今日雪ノ下に聞いてみるわ」

そうか、部活っていうのは夏休みもやるものだったな。

でも授業がある訳でもないし、依頼なんてどうせ来ないだろうけど。

「お兄ちゃん早く起きて〜」

「うーん、あと80分くらい…」

「そんな時間があると思ってるの？全く〜みいちゃんなんだから」

朝っぱらから茶番に興じるのは、俺の愛すべき妹の小町。

千葉の兄貴風に言うと、ラブリーマイエンジェルといったところか。

小町からはシスコンシスコン言われるが、断じて違うぞ？

ただ一番愛している異性が妹ってだけだ。

妥協じゃなく理解してほしい。

「ん〃ん〃つ、冗談だよ。おはようさん」

「おはよ！お兄ちゃん！〜飯出来てるから早く準備してよね」

「分かった、さっさと着替えてくるわ」

「んっ、よろしい」

そう言つて俺の部屋から出る小町。

さてと、言った手前急いで準備しなきゃな。

準備も終わらせリビングに向かうと、愛妹特製の朝食が並んでいた。

「簡単なものだから」と言うが、いつもありがたいな。

と、心の中で思っておく。

本人に直接言えばって？嫌だよ恥ずかしい。

「つてことでお兄ちゃん、今日もよろしくね〜」

「俺じゃないと送ってってくれて言ってるの分からないぞ。あつ、これ八幡的にポイント高い」

「小町的にはちよーつとポイント低いかな…」

イマイチ小町のポイントシステムが理解出来ないお年頃。

ポイントカンストさせたらどんな特典あるんだろ。

まさか、小町と結婚…？

とかかんとか妄想を広げながらも朝食を食る。

「そうだ、お兄ちゃん夏休みは奉仕部あるの？」

「そういえば聞いてなかったな。今日雪ノ下に聞いてみるわ」

そうか、部活っていうのは夏休みもやるものだったな。

でも授業がある訳でもないし、依頼なんてどうせ来ないだろうけど。